

Home Economics 技術・家庭科(家庭分野)

食べる、着る、住む、買う……私たちが普段何気なく行っていることや、当たり前のように存在しているものについて議論すると、新たな発見があったり、見方・考え方が広がりたり深まったりします。さらに実生活で実践することによって、より快適になった、充実したなど実感することができるでしょう。そこに技術・家庭科(家庭分野)のおもしろさがあると考えています。

技術・家庭科(家庭分野)では、生活の一部を切り取って題材を構想します。その際、子どもたちが自分の行動を振り返ったり、互いの考えをかわらせたりする機会や、実践して検証する機会を設定していきたいと思えます。さらに今年度は、そのような活動に主体的に取り組むために、子どもたちが解決したくなるような課題を生みだせるよう、研究を進めていきたいと思えます。

ぜひ、研究協議会に足を運んでいただき、多くの方にご意見をいただけたら幸いです。よろしくお願いいたします。(堀池美衣)



English 英語科

「友だちの考えたロボットは『He uses the laser beam. It's from eyes.だ』って『私も use を使っておもしろくできそう!』友だちの考えを英語で聞くと、『異文化をもつ人とかかわる時は、相手の文化を理解するだけでは足りない』と気づいた。流暢でなくても、英語で自分の考えを伝え合うことが大切だと実感した。店員役で『お似合いです』とうまく伝えられなかったけど、客役の友達が伝えたいことを理解してくれた。今度こそ『You look nice!』を伝えたい。喜んでもらいたい。」

英語科では「英語で自分の思いや考えを臆さず伝え合う」ことを授業の土台と考え、子どもたちが英語で伝え合うことに達成感や充実感をもつような題材の実践を積み重ねてきました。また、そのような英語でのやりとりだからこそ、子どもたちが学び合うことができる構想も継続しています。

今年度は、子どもたちが英語でのやり取りの中から、さらに主体的に考えを深めたり、英語表現の幅を広げたりすることができるような題材を開発していきます。十月の研究協議会では、英語でのやりとりで魅力を感じながら、いきいきと学び合う子どもたちの姿を願っています。(長田敬司・稲葉英彦・高田幸秀)



2017.春 No.78
静岡大学教育学部附属静岡中学校

次期学習指導要領に向けて

校長 村山 功



昨年度末に次期学習指導要領が告示されました。これまでの学習指導要領とは異なり、教育目標だけでなく教育の方法および評価についての記述もなされています。1992年の「新しい学習観」から続く改訂の流れの中では、最も挑戦的なものと言えるでしょう。そのため、評価の部分などはまだ十分に練られていない印象を受けますが、移行期間中に有益な情報が追加公開されていくと思います。

次期学習指導要領では教育目標として資質・能力の三つの柱が示され、それを育む「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められています。資質・能力の三つの柱の中では、やはり「学びに向かう力、

人間性等」の扱いが注目されます。思考力・判断力・表現力等は、現行学習指導要領よりさらに高いレベルが要求されていますが、これまで取り組んできたことの延長として捉えることもできます。これに対し、「学びに向かう力、人間性等」を育むためには、これまでの教科指導を大きく変えていくだけではなく、教科横断的なカリキュラム・マネジメントが不可欠となります。

本校ではこれまで、『人間形成のための学力』という研究主題のもとで、教科の学習を通じた人間形成について研究を進めてきました。通常授業の教育目標とされている「Tool としての学力」と区別された「人間形成のための学力」は、まさに資質・能力の三本目の柱につながっています。また、現在の研究主題である『共に創りあげる授業』は、「Tool としての学力」と同時に「人間形成のための学力」を育むための授業の在り方を研究するものです。このように、本校の研究は皆様が次期学習指導要領に備える上で有益な情報を提供できると信じています。教育研究協議会の発表だけではなく、普段の本校を見に来ていただいて、その取り組みをご理解いただければと願っています。

「共に創りあげる授業」 がめざすもの

研修部長 高田 幸秀

私たちの周りには様々なマニュアルが存在します。マニュアルは便利で、誰もがそのマニュアルを使って一人で物事を成し遂げることができ、小さなミスも減ります。誰もが一定の成果をあげることができ、作業の効率化にもつながっていることは間違いないでしょう。世の中では効率化を図ることに価値がおかれているのかもしれませんが。

一方で、効率化のみが進んだ社会にもデメリットはあるでしょう。誰もが一定の成果をあげられ、小さなミスは減るかも知れませんが、いざ、そのマニュアルでは対応できない事態が起ってしまったときに、マニュアルに頼りすぎるがために、仲間の考えを取り入れることができない状況や、自分で考えて

行動したり、物事を進めたりすることができない状況になることもありうるのではないのでしょうか。

これからの社会に求められているのは、マニュアルでは対応できない事態が起こったときも、自分自身でできることは何かを考えながら、そこにいる仲間とその考えを伝え合い、互いが納得できるよりよい答えを導き出して、物事に取り組むことができる人だと考えます。そのような人を育む授業こそ、私たちが提案する「共に創りあげる授業」なのです。

本校は「共に創りあげる授業」の中で、『思考力』を育みながら教科ならではの文化を味わう子どもたちの姿を追い求めて、教育研究を進めております。本年度は特に、一題材や一授業の子どもたちの学びの変容を見とり、その際の教師の手だてや活動の有効性を探りながら授業改善へとつなげていきます。10月12日(木)の教育研究協議会では、多くの方々に本校の授業を参観いただき、今後の研究へのご示唆やご批判をいただければと思います。

2017 教育研究協議会のご案内(第1次)

教育研究協議会を、下記のとおり開催いたします。新しい研究テーマになって4年目の協議会となります。多くの方にご参会いただき、ご指導、ご助言を賜りたく、ご案内申し上げます。

- 期 日 平成29年10月12日(木) 9:00~16:15
- テーマ 共に創りあげる授業 —『思考力』を育みながら「教科ならではの文化」を味わう子どもたち—
- 会 場 静岡大学教育学部附属静岡中学校
〒420-0856 静岡市葵区駿府町1番86号
TEL 054-255-0137 FAX 054-252-7335
ホームページアドレス <http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp>
- 内 容 全体発表 教科発表 公開授業Ⅰ 公開授業Ⅱ 教科別研究協議会 講演会
詳細については、9月に改めてご案内いたします。お問い合わせは、上記までお願いいたします。
- 講 師 東京大学 高大接続研究開発センター 教授
大学発教育支援コンソーシアム推進機構(CoREF) 機構長
国立教育政策研究所 フェロー
白水 始 先生



公開研修の予定 詳細はホームページをご覧ください。

- 全体研究授業① 森 正樹(数学科) 6月14日(水) 10:40~11:30
- 全体研究授業② 土肥正通(美術科) 11月15日(水) 10:40~11:30

「交流研修」のお知らせ

授業を構想するとき、そして実際に子どもたちと授業をする際に、悩んだり困ったりすることはありませんか。私たちも同様に、日々悩みながら実践を重ねています。また、世の中では、来るべき学習指導要領の改訂を前に、「主体的・対話的で深い学び」「見方・考え方」などの言葉も話題になっています。

附属静岡中学校では、先生方とともに授業について研修をする機会を設けようと考えました。互いの授業を参観したり、授業や教科について語り合ったりすることは、授業実践力の向上につながるでしょう。未来を拓く子どもたちのために、私たちとともに研修をしませんか。

連絡先 TEL 054-255-0137 FAX 054-252-7335 E-mail horike.mie@shizuoka.ac.jp
担当 堀池美衣

協議会に向けて 各教科のPR

Japanese 国語科

これをお読みの国語科の先生！授業をして以下のようなこと、ございませんか？「あまり意見が出なかった」「グループで話し合った後の共有が発表会で終わってしまった」「子どもたちから思っていたような活動が生じなかった……」そのような国語の授業での「うまくいかなかったな」を、私たちが「共に創りあげる授業」で解決しよう、日々実践を重ねています。

昨年度は、切実感を生む題材の選定と出会いを重点に授業を構想し、仲間と共に作者の意図を明確にするために文章を創ったりすることを柱に研修を進めてきました。

今年度は、子どもたちが主体的に授業に参加して「教科ならではの文化」を味わうことが進めよう、「対話の充実」に重点を置き、研修を進めていきます。仲間と共に言語感覚を磨き合うために欠かせない題材との出会いや、子どもが解き明かしたいと思える問いを大切にしていきたいながら、授業を構想し、授業の質を高めます。協議会では、そのような授業をお見せできるようにしたいと考えておりますので、ぜひご参加いただき、忌憚のないご意見をいただけたらと存じます。よろしくお願いたします。

(梶山哲耶・鈴木康弘・木下聡美)



Social Studies 社会科

社会科の授業を通して、子どもたちに味わってほしい「社会科ならではの文化」とは、どのようなものでしょうか。私たちは、「様々な解釈の仕方や多様な価値観に気づきながら、『すべての人にとって最善の社会の姿』を創りあげていくこと」であると考えています。社会を「自分たちの手で創りあげていくもの」ととらえたとき、異なる立場や様々な見方・考え方を理解したうえで、よりよい社会の姿を模索することが大切ではないでしょうか。そのため、他者の考えの意図に迫ったり、多面的・多角的に物事をとらえたりする過程が欠かせないでしょう。

今年度は、「社会科ならではの文化」を味わう授業を実現するために、子どもたちが追求したいと思える題材を開発し、解き明かしたいと思える問いを設定することに、重点を置きます。また、対話を促進する手だてをうつつにより、学びを深めていきたいと考えています。「社会科ならではの文化」を味わう経験を積み重ねることにより、子どもたちは「社会を創る人」へと成長していくことでしょうか。子どもたちが社会科の授業を通して、社会の中でどのように生きていくかについて自分なりに考えをもてるようになることをめざして、実践を重ねていきます。

(尾崎弘剛・勝又悠太)



Mathematics 数学科

私たち数学科では今年度の実践において「子どもたちが数学する授業」をめざしていきます。「子どもたちが数学する」とは、法則や数理を単に覚えるということではなく、それらを導く過程を議論することだと考えます。子どもたちが、法則や数理を一度立ち止まり「本当に正しいのか」「どのような場合でも成り立つのか」などとふりかえり「もっといい方法を求めてみよう」「まだ他にも性質はないか探してみよう」などと問い直すことで、数学の論理を創りあげていくことができるのではないのでしょうか。

私たちは、子どもたちの心が揺さぶられるような題材との出会いを大切に、子どもたち誰もが「根拠」をもつことができるようなかわりをしていきます。そして、その「根拠」は重ね合わされることにより、曖昧なものではなく、数学的なことばや表現による「根拠を明確にした考え」となるでしょう。そのために、私たちは飛躍や無駄のない論理を子どもたちが創りあげていけるよう、見通しをもって授業を構想していきます。

研究協議会では、多くのご意見をいただけたら幸いです。よろしくお願いたします。

(杉山元希・松本匡由・森 正樹)



Science 理科

「直列回路と並列回路の電球の明るさはなぜ違うのだろう」「電流の値が違うんじゃない?」「電流計で測定して確かめてみたい」回路を作っている中で、子どもたちから出た素朴な疑問から、追究の方向性が定まってきました。

身の回りの科学技術や、神秘的な自然現象に疑問をもち、そのしくみを解き明かすために実験や観察に打ち込み、自分なりの考えを構築していく過程が、理科ならではの文化であると私たちは考えています。子どもたちが理科ならではの文化を存分に味わえるために、私たちは題材や題材との出会いを工夫しています。また、視野を広げたり考えをより深めたりするため、仲間との対話が生まれるように、教師が意図した関わりをし、子どもたちが学びを深めていけるようにしていきます。十月の協議会では、子どもたちが理科ならではの文化を味わい、考えを変容させていく姿を基に忌憚なきご意見をいただけますようお願いたします。

(海野雅爾・井出祐介)



Music 音楽科

「身の回りのものでも、すてきな音色が響くことがおもしろい。様々な音色について話すことが新鮮だった」「ポウルでも、拍節周期や音の役割を考えれば、立派な音楽をうみ出せるからすごいと思った」「しっかりとした楽器がなくとも音楽はつくれる。昔の人はそうやって音楽をうみ出してきて、それが発展して今の音楽があるとうわかった」

ガムランの鑑賞をしたり、ポウルを使ってガムラン風の音楽を創作したりすることを通して、子どもたちは様々な音色や変化する音の重なりなどを知覚し、それらの特質や雰囲気を感じ受けていききました。そして、音や音楽に対して素直に「すてき!」「おもしろい!」と口にすると子どもたちの姿が様々な場面で見られ、子どもたちは心からの感動を伴いながら音や音楽に価値を見いだしていたようでした。

音楽科では、音や音楽そのものに心が動かされる瞬間を子どもたちと共有していきたいと考えています。さらりと歌い流したり聴き流したりするのは、音や音楽に対する感性を豊かに働かせながら、仲間と共に思考・判断して表現・鑑賞を深め合っていくことが、様々な音や音楽のよさや美しさを主体的に味わっていくことにつながるでしょう。子どもたちの音や音楽に対する感性を引き出し、さらに豊かな研究を重ねていきます。

(小林真人)



Arts 美術科

三年生の題材「附中生に伝えたいメッセージ」(ポスター制作)では、第一時に亀倉雄策さんの「燃え落ちる蝶」(一九八三年)の鑑賞を行いました。燃え落ちる蝶の姿とHIROSHIMAのキーワードから原爆をイメージした子どもたちは、作者がポスターで何を伝えようとしているのか、考えを述べ合っていました。「すべの蝶が燃えていることから、原爆の威力からは誰も逃れられないことを示している」「飛べなくなつた蝶から生きたいと願った犠牲者の無念も感じられるし、原爆で吹き飛ばされてしまった命の儚さも感じられる」などの意見が出され、考察の深まりを感じました。(他の参考作品も鑑賞しました)。これから子どもたちが制作していくポスターが、伝えたいという思いと伝わるための工夫が詰まったものであってほしいと願い、楽しみにしているところです。

美術科では、主体的な学びを引き出すためのかわり合いのあり方を考え、子どもたちが主題(表したいこと)をもち、主題を表すための色や形、表現の工夫を考えながら、豊かに創造活動をしていくことを目指して研究を進めています。秋の研究協議会に足を運んでいただき、様々なご意見・ご指導をお願できれば幸いです。

(土肥正通)



Health & Physical Education 保健体育科

保健体育科では「自分(たち)なりの合理的な動きや健康的な生活を創りあげられるおもしろさを味わう授業」を目指し、授業実践を重ねています。

昨年度の実践では、チームでの戦術や個人での動き方について仲間と共に考え、体現しようとすることを繰り返しながら、作戦版や視覚機器を用いたり、動き方について声をかけ合ったりする子どもたちの姿が見られました。子どもたちの感想には、戦術を体現できたことに仲間との一体感を得たり、仲間のアドバイスを受けてよりよい動きになったことに満足感を得たりしていることがうかがえる記述がありました。一方で、よりよい動きになるための新たな視点や考えをもつことができず、仲間への声かけや動きが止まってしまった子どもの姿も見られました。

そこで、本年度は子どもたちが新たな視点に気づき、考えをもちながら試行錯誤できるような題材構想や手立てについて研究をしていきたいと考えています。そのような手立てや構想において、子どもたちは「体現する」おもしろさだけでなく「新たな視点を導く」おもしろさも感じながら授業に取り組んでいくことしょう。研究協議会では、多くの先生方に参観していただき、ご意見・ご助言をいただきたいと思います。よろしくお願いたします。

(杉山慎一郎)



Industrial Arts 技術・家庭科(技術分野)

技術・家庭科(技術分野)は、生活をよりよくするために学習する教科であり、技術的課題の解決や実用品の設計、計画と製作(制作)・育成に挑む教科です。では「技術・家庭科(技術分野)ならではの学び」とはどのようなものでしょうか?

ものを創造するとき生じる様々な課題に対して、最も適した解決策を見いだす学びがあります。また、自ら創造・工夫したものを実用品に生かすことが前提であるため、獲得した知識や方策を吟味していく学びもあります。さらに、自ら考え、主体的に判断し、よりよく課題を解決するためには、個人で十分追求した上で、複数の人が意見を伝え合ったり、批判し合ったりする学び合いを欠かすことはできません。こうして得た知識や方策だけでなく、その過程を含めて「技術・家庭科(技術分野)ならではの学び」であると考えています。

十月の研究協議会では、子どもたちの姿を参観していただき、「技術分野ならではの学び」について、ともに探っていききたいと考えています。

(本部康司)

